

カシヨはなぜ退陣したか

紅旗 1964年 21・22合併号



外文出版社

北京

フルシチョフはなぜ退陣したか

『紅旗』誌1964年第21、22合併号社説

外文出版社

北 京

フルシチョフはなぜ退陣したか

『紅旗』誌一九六四年第二十一、二十二合併号社説

フルシチョフが退陣した。

ソ連の党と国家の指導的地位をのっとったこの大陰謀家、現代修正主義を代表するこの頭目は、ついに歴史の舞台から追い出されてしまった。

これは、ひじょうによいことである。世界人民の革命事業に役だつひじょうによいことである。

フルシチョフの失脚は、修正主義反対闘争を堅持してきた全世界のマルクス・レーニン主義者の偉大な勝利であり、現代修正主義の大きな破たん、大きな失敗をしめすものである。

フルシチョフはいつたいどうして退陣したのか、どうしてごまかしとおしてゆけなくなったのか。

3 この問題については、全世界のいろいろな政治勢力のあいだで、あれこれと論議されている。

帝国主義や各国の反動派、およびさまざまな日和見主義者や修正主義者は、フルシチョフに同情するものも、フルシチョフと利害の衝突するものも、この「ひじょうに力強い」と思われた「人物」の突然の失脚にたいして、みなあれこれの見方をしている。

多くの国の共産党、労働者党も、フルシチョフ退陣の問題について、論文や文書を發表し、それぞれの見解をあきらかにした。

いま、われわれもまたこの論文で、フルシチョフがどうして退陣したかという問題について調べてみることにする。

マルクス・レーニン主義者からみれば、フルシチョフの退陣は、けっして理解しがたいことではなく、まったく予想していたことだ、と言うことができる。マルクス・レーニン主義者は、フルシチョフのこの末路を早くから見とおしていた。

人びとはフルシチョフ失脚の原因について説明するのに無数の罪状をかぞえあげることができ。だが、いくらかぞえあげてみても、もっとも根本的な罪状はただひとつ、つまりかれがマルクス・レーニン主義のさししめす社会歴史の發展法則にそむき、ソ連人民と世界人民の革命的な意志にそむいて、歴史の前進をさまざまたげようと企てたことである。人民の前進途上に石があれば、それを取りのぞかなければならない。フルシチョフらのやからが望む望まないにかかわりな

く、しよせん、人民はかれをふり捨ててしまふのである。フルシチョフの退陣はまさしく、ソ連人民と世界の革命的人民が修正主義反対闘争を堅持してきた必然的な結果にはかならない。

われわれの時代は、世界資本主義と帝国主義が滅亡にむかい、社会主義と共産主義が勝利にむかう時代である。この時代がわれわれにあたえた歴史的使命は、各国の具体的条件にもとづき、各国人民じしんの手によって、プロレタリア世界革命の完全な勝利をいかに実現し、帝国主義もなく、資本主義もなく、搾取制度もない新しい世界をうちたてることである。これは、歴史の發展の必然的な趨勢であり、全世界の革命的人民の共通の要求である。この歴史の趨勢は、人びとの意志で左右できない客観的な法則であり、いかなる力もこれにさからうことはできないのである。だが、フルシチョフというこの現代政治舞台の道化役者は、あくまで逆コースをとり、歴史の車輪を資本主義のふるい道へ引きもどして、死にかかった搾取階級と搾取制度の寿命をひきのばそうと夢みた。

フルシチョフは、これまでの日和見主義、修正主義のあらゆる反マルクス主義的観点をかき集めて、いわゆる「平和共存」「平和競争」「平和的移行」「全人民の国家」「全人民の党」という体系だった修正主義路線にまとめあげた。かれは帝国主義にたいして降伏主義を実行し、階級協調論によって各国人民の革命闘争を解消し、これに反対した。かれは国際共産主義運動のなか

で分裂主義を実行し、大団排外主義をプロレタリア国際主義にとつてかわらせた。かれは国内でやっきになってプロレタリアート独裁を瓦解させ、ブルジョアジーの思想、政治、経済、文化を社会主義制度にとつてかわらせ、資本主義復活の道をすすもうと企てた。

この十一年らい、フルシチョフは、レーニン、スターリンが指導したソ連共産党と最初の社会主義国の威信を利用して、ソ連人民の真の願いにそむき、悪事の限りをつくしてきた。まとめれば、つぎの通りである。

一、かれは、いわゆる「個人迷信反対」を口実に、もつとも悪どいことばでソ連共産党とソ連人民の指導者スターリンをさかんにののしつた。かれがスターリンに反対したのは、マルクス・レーニン主義に反対したことにはかならない。かれはスターリンの指導していた全期間にわたるソ連人民の偉大な成果を一举に全部抹殺して、プロレタリアート独裁をけがし、社会主義制度をけがし、偉大なソ連共産党をけがし、偉大なソ連をけがし、国際共産主義運動をけがした。フルシチョフのこうしたやり方は、帝国主義と各国反動派の反ソ・反共の活動にもつともけがらわしい武器を提供した。

二、かれは、一九五七年の宣言と一九六〇年の声明に公然と違反して、アメリカ帝国主義との「全面的な協力」を追求し、ソ米両国首脳が「人類の運命を決定する」というデタラメな主張をうち出し、アメリカ帝国主義の頭目が「心から平和を望んでいる」と言つて、一貫してこれをもち上げてきた。かれは、冒険主義的行動をとつてミサイルをキューバに運び込んだかと思うと、降伏主義的行動をとつて、卑屈にもアメリカの強盗の命令どおりに、キューバからミサイルと爆撃機を撤去し、アメリカ艦隊の検査をうけいれ、はなはだしきにいたつては、キューバ政府にくれて、キューバの国家主権を売りわたさうと企て、アメリカにあやつられた国連がキューバに要員を派遣して「査察」することに同意した。フルシチョフのこうしたやり方は、十月革命以来の四十余年間にかつてなかつたこのうえもなく大きな恥辱を偉大なソ連人民にあたえた。

三、かれは、アメリカ帝国主義のおしすすめている核恐喝政策の要求に迎合し、社会主義の中国が自分じしんの核防衛力をうちたてるのを阻止するため、ソ連じしんの国防力をそこなうことさえ惜しまず、米、英両帝国主義国とグルになつていわゆる部分的核実験停止条約に調印した。この条約が大きなペテンであることは、事実が証明している。フルシチョフがこの条約に調印したことは、良心のひとかけらをも失つて平気でソ連人民の利益を売りわたし、社会主義諸国人民の利益を売りわたし、平和を愛する全世界の人民の利益を売りわたしたということである。

四、かれは、いわゆる「平和的移行」の名のもとに、百万手をつくして資本主義国人民の革命運動をさまざまに、いわゆる合法的な「議会の道」を進むよう、かれらに要求した。このあやまっ

た路線は、プロレタリアートの革命的意志をマヒさせ、革命的人民の思想を武装解除し、いちぶの国の革命事業に重大な挫折をもたらした。このあやまった路線は、いちぶの資本主義国の党をまったく生氣のない新しい型の社会民主党に変え、ブルジョアジーの従順な道具に変質させた。

五、かれは、「平和共存」という看板のもとに、やつきになって民族解放運動に反対し、これをぶちこわし、ひいては、アメリカ帝国主義とグルになって被抑圧民族の革命闘争を弾圧した。

かれは、国連駐在ソ連代表に指図して、コンゴ人民を弾圧するアメリカ帝国主義を援助するための侵略軍の派遣に賛成投票をさせるとともに、ソ連の輸送手段を使つていわゆる「国連軍」をコンゴに送りこんだ。かれは事実上、アルジェリア人民の革命闘争に反対して、アルジェリアの民族解放闘争をフランスの「内政」であると言いくるめた。アメリカ帝国主義がベトナムでデッチあげたバック・ボー湾事件にたいし、かれはこともあろうに「超然とした」態度をとり、苦心さんたんと窮地に陥つた挑発者アメリカを救い、侵略強盗のためにその罪を弁解してやった。

六、かれは、公然と一九六〇年の声明にそむき、全力をあげて裏切り者チトー一味の名誉回復のためにつくし、すでにアメリカ帝国主義の手先になり下がったチトーを「マルクス・レーニン主義者」だと言い、すでに資本主義に変質してしまったユーゴスラビアを「社会主義国」だと言いくるめた。かれは、チトー一味と「おなじ思想をもち、おなじ理論を指針としている」と、く

りかえし言明し、ユーゴスラビア人民の利益を売りわたし、国際共産主義運動を破壊したこの裏切り者に謙虚に学ばなければならない、と表明した。

七、かれは、社会主義の兄弟国アルバニアを不倶戴天の敵とみなし、百方手をつくして同国に打撃を加え、これを破壊しようとし、なんとかして同国を一口にのみこんでしまいたいと思いつめていた。かれは強引にアルバニアとのすべての経済関係、外交関係を断ちきり、横暴にもワルシャワ条約機構と経済相互援助会議の参加国としてのアルバニアの正当な権利を剝奪し、また、アルバニアの党と国家の指導部をくつがえすように公然と呼びかけた。

八、かれは、マルクス・レーニン主義を堅持し革命的路線を堅持している中国共産党を極端に敵視した。なぜなら中国共産党は、かれが修正主義、降伏主義をおしすすめるうえで大きな障害であったからである。かれは中国共産党と毛沢東同志にたいし、ほしのままにデマをとばし、中傷をおこない、同時に、いろいろの卑劣で悪い手段を用いて、社会主義中国を転覆させようと夢みた。かれは信義にそむいて数百にのぼる協定と契約を破棄し、中国で働いていた千名以上のソ連専門家をかつてに引き揚げた。かれは中ソ両国の国境地帯で紛争を引きおこし、さらに新疆地区で大規模な転覆活動までおこなった。かれはまた、社会主義中国にたいするインド反動派の武力攻撃を支持し、アメリカとともに、軍事援助によって、インド反動派が中国に軍事的挑発

をおこなうのをはげまし助けた。

九、かれは、兄弟国の相互關係にかんする準則を公然とふみにじって、兄弟国の独立と主權を侵犯し、ほしいままに兄弟国の内政に干渉した。かれはいわゆる「經濟相互援助」の名で、兄弟国が自主独立の基礎のうえに自国の經濟を發展させることに反対し、むりやりに兄弟国を原料供給地と商品販売市場に変え、兄弟国の工業部門を付属的な工業に変えようとした。かれはこれらをつルシチョフじしんの理論と學説だとひけらかしたが、実際には資本主義世界の弱肉強食の原則を社会主義國家間の相互關係にもちこみ、独占資本グループの「共同市場」を自分の見ならうべき手本としたのである。

十、かれは、兄弟党の關係にかんする準則を徹底的にふみにじって、いろいろの陰謀手段を用い、ほしいままに兄弟党にたいし転覆、破壊活動をおこなった。かれは自分の党の中央委員會、党大会およびいちぶの兄弟党の党大会で、マルクス・レーニン主義を堅持する兄弟党にたいして、大規模な公然たる攻撃をほしいままに加えたばかりか、多くの兄弟党の内部で、墮落變質分子、裏切り者、變節者を公然と買収して自分の修正主義路線を支持させ、党内のマルクス・レーニン主義者に打撃をあたえ、さらには不法にもかかれらを除名させて、しやにむに分裂をひきおこした。

十一、かれは、兄弟党が話し合いによつて見解を統一する準則をかつてきままにふみにじり、みづからおやじの党をもつて任じ、不法な兄弟党國際會議の招集を自分の思いどおりにがむしやらに決定した。かれは一九六四年七月三十日付の通知書のなかで、今年十二月十五日にいわゆる二六党起草委員會を招集するという命令を下し、公然と國際共産主義運動を分裂させようとした。

十二、かれは、帝國主義の必要にこたえ、国内の資本主義勢力の必要にこたえるため、資本主義へ逆もどりする一連の修正主義の政策を実施した。かれはいわゆる「全人民の國家」の看板のもとにプロレタリアート独裁を解消し、いわゆる「全人民の党」の看板のもとにソ連共産党のプロレタリア的性格を変え、マルクス・レーニン主義の党建設の原則にそむいて、党をいわゆる「工業党」と「農業党」に分割した。かれはいわゆる「共産主義の全面的な建設」という看板のもとに、あらゆる手段を尽くして、レーニン、スターリンの指導のもとにソ連人民が血と汗で築きあげた世界最初の社会主義國を、資本主義のふるい軌道へひきもどそうとした。ソ連の農業と工業にたいするかれのデタラメな指揮は、ソ連の國民經濟に深刻な破壊をこうむらせ、ソ連人民の生活にひじょうに大きな困難をもたらした。

この十一年らしいつるすべのふるまいが物語っているように、かれのとつた政策

は、帝國主義と組んで社会主義に反対し、アメリカと組んで中国に反対し、各国反動派と組んで民族解放運動と各国人民の革命に反対し、チトー一味やその他さまざまな裏切り者と組んですべてのマルクス・レーニン主義兄弟党、および帝國主義とたたかっているすべての革命派に反対するものであった。フルシチョフのこれらの政策はすべて、根底からソ連人民の利益に危害をあたえ、社会主義陣営諸国人民と全世界の革命的な人民の利益に危害をあたえた。

以上がつまり、いわゆるフルシチョフの「功績」にほかならない。

フルシチョフというこの人物が失脚したのは、けつして老齢とか健康状態の悪化とかのためではなく、また単にかれの仕事のやり方や指導作風のあやまりのためでもなく、かれが修正主義の総路線と一連のあやまった対内、対外政策をおしすすめた結果にほかならない。

フルシチョフは、人民大衆など、まったく眼中におかなかつた。かれはいつも、ソ連人民の運命を自分の思いのままになるものと思ひこんでいた。かれにとっては、人民大衆など、でくのぼうにすぎず、自分で配できるものと思ひこんでいた。かれにとつては、人民大衆など、でくのぼうにすぎず、自分で配けるものと思ひこんでいた。かれは、ソ連人民と各国人民を強引にかれの修正主義の指揮棒のもとにはいつくばわせようと夢みた。このようにして、かれは自分じしんをソ連人民、社会主義陣営諸国の人民、全世界のプロレタリアートと革命的な人民に敵対する地位におき、自分じ

しんを、万人から見すてられ、内外からハサミウチをうける袋小路に追いこんでしまったのである。かれは絞首刑のナワを自分のくびにかけた。これはつまり、みずから墓穴を掘つたということにほかならない。

史上、歴史の流れを逆転させようと夢みた道化役者は少なくない。だが、これらの道化役者で、みずから名誉と生命を失つて終わりをづけなかつたものは、一人もいない。無数の事例が立証しているように、およそ社会発展の歴史の要求を無視し、人民の意志にさからつて、データラメをやつてのけるものは、それがどのような「英雄的人物」であり、どのようにいばりかえつた人物であっても、結局はみな一文の値うちもない、こつけない人間にかわつてしまふだけである。人をそこねる目的からはじまつて、自分をそこなう末路におわるということ、これがつまり、これらに共通した法則である。

第一インターナショナルの時期、バクーニシンの「人物」は、一世をふうびした反マルクス主義の「英雄」だったが、まもなく人びとから歴史のゴミ箱にほうりこまれてしまった。第二インターナショナルの時期、反マルクス・レーニン主義の「傑物」であつたベルンシュタインとカウツキーは一時、国際的な指導的地位をひとりじめした「大立者」だったが、結局は、裏切者という悪名をいつまでも歴史にのこしたにすぎない。レーニンの没後、反対派の頭目だったトロツ

キーは、まるで自分が「英雄」でもあるかのようにふるまった。だが、「かれは英雄よりもむしろ役者に似ており、役者を英雄と混同することはけつしてできない」と、スターリンがいったことばの正しさは事実によって立証されている。

まさに「人間正道是滄桑（発展は人間社会の不滅の法則である——訳注）」というとおりである。歴史の教訓がわれわれに教えているように、歴史の車輪の前進をおしとどめようとするものはすべて、ペしゃんこにおしつぶされてしまうものである。毛沢東同志がくりかえし指摘しているとおり、帝国主義とすべての反動派はハリコの虎であり、修正主義者もまたハリコの虎である。反動階級、反動勢力を代表する「英雄豪傑」どもは、たとえ歯をむき出して、わがもの顔にふるまっても、実際には見かけだおしのハリコの虎にすぎず、歴史の上にあわただしくおらわれでは消えてゆく旅人のようなものにすぎない。それほど長い時間がかからなくても、かれらはやがて歴史の大波にのみこまれてしまうだろう。フルシチョフもその例にもれない。往時をおもいおこすと、ソ連共産党第二十回大会と第二十二回大会でスターリンに大いに反対し、マルクス・レーニン主義に大いに反対したとき、またブカレスト会議でマルクス・レーニン主義を堅持する中国共産党に不意打ちをかけてきたとき、そのときのかれの鼻息はまことにすさまじいものだった。ところが、その後問もなく、この反ソ、反共、反中国の「英雄」は修正主義の先輩の後塵を

拝することとなった。人びとがどんなに正道にかえるようにとすすめても、かれはぜんぜん耳をかさず、ついに自分じしんを死地においこんでしまった。

フルシチョフは失脚した。かれがひたすらおしすすめてきた修正主義路線も破産してしまった。だが、マルクス・レーニン主義は今後も修正主義思潮をたえずうちまかして、いつそうの発展をつづけることであろう。各国人民の革命運動もあいかわらず前進途上の障害をたえずとりのぞいて、発展しつづけることであろう。

もちろん、歴史は依然としてまがりくねった道を進んでいくであろう。フルシチョフが失脚したとはいえ、かれの支持者であるアメリカ帝国主義、各国の反動派、現代修正主義分子はけつしてあきらめてはいない。これらの妖怪へんげのたぐいはいまなお、呪文を唱えてフルシチョフの「魂をよびもどし」、いたるところでフルシチョフの「貢献」と「功績」なるものを宣伝し、これまでどおりフルシチョフの定めた路線にそって事がはこばれ、いわゆる「フルシチョフのいないフルシチョフ主義」が実行されるように夢みている。だが、この道は通れない——われわれはそう断言できる。

さまざまな代表的人物とさまざまの思潮はいつも、舞台にのぼってひと芝居うとうとするものである。めいめいがどの道をあゆむか、その選択はまったく各自の自由である。だが、歴史は

かならずマルクス・レーニン主義のあきらかにした法則にしたがって前進し、十月革命の道にそって前進するだろう。われわれはそのことを信じて疑わない。革命的伝統をもつ偉大なソ連共産党とソ連人民は、社会主義の偉大な成果をまもるため、レーニンのきずきあげた最初の社会主義大国の崇高な威信をまもるため、マルクス・レーニン主義の純潔をまもるため、そしてまたプロレタリアートの革命事業の勝利にみちた発展をまもるため、かならず新たな貢献をするであらう。

国際共産主義運動は、マルクス・レーニン主義とプロレタリア国際主義の基礎のうえに団結しよう！

フルシチョフはなぜ退陣したか

1964年 初版発行

定価 10 円

出版者 外 文 出 版 社

(北京阜成門外百万荘)

発行者 中 国 国 際 書 店

(北 京 P. O. Box 399)

番号：(日)3050-1051

3-J-641P

00012

